新聞社は眠らない

深夜の情報ターミナル

朝刊印刷作業を見学

十一月二十二日、新潟大学で開講されている地域文化論の授業の一環として、新潟市西区にある新潟日報本社の見学会が開かれた。

見学会に参加したのは、同大で新聞製作について学んでいる学生ら六人。

午後十一時過ぎに同社に到着した学生らは、まず翌日の朝刊の整理作業を見て回った。

整理作業とは、記事を紙面に組み込むこと。

編集室では読みやすい紙面づくりのために校了時間ぎりぎりまで頭を捻る社員の姿が見えた。深夜にもかかわらず電話で通信社に記事の詳細を追究する場面もあった。

学生はその様子に圧倒されつつも、負けじと社員の方の話を聞き真剣にメモを取ったり、積極的に質問を重ねたりした。中には、詳しい勤務時間など踏み入った質問をする学生もいた。

また、社員の中には女性も多く、性別を問わず活躍の機会があることを感じさせた。

巨大な機械に仰天

次に向かった本社隣の印刷センターでは、巨大な輪転機や自動で用紙を補充する機械などが大音量の中稼働しており、学生を驚かせた。

一時間で十七万部を刷ることができる巨大な輪転機を前に、学生は体を屈め視点を変えて観察するなど旺盛な好奇心を発揮した。

案内した社員は直径約一メートル幅二メートルになる筒型の印刷用紙を「トイレットペーパーのお化けみたいでしょ」と例え、長大な用紙のインパクトと相まって場を和ませた。

その後学生は記事管理の端末を操作する様子を見るなどし、家路に就いたのは午前一時を過ぎた頃だった。帰途の車の中で学生は各々の感想を述べ合った。

学生は見学会を通し、時間を問わず情報社会の一端を担うものの役割を果たし続ける新聞社への意識を強めた。

写真＝巨大な輪転機の説明を聞きメモをとる学生たち